此の外、斯の如き實例は色々あるが、併し犬が人間に對して、己れの觀念或は欲望を通じ得ることは、以上二つの事實に據つて明かであらうと思ふ。

二一〇　牧羊犬の智力

犬のうちには、羊の監督に使用せられて居るものがあるが、此の種の犬は實に驚くべき知力を現はして居る。よく牧羊者の命令を理解して其の指圖通りに働くは勿論、又た監督者なしに、獨りで巧みに羊を追ひ或は其の群を分離するやうな事をするのである。

ローリ　セントルスといふ人は、牧羊犬の知力に就て下の如き事實をロマニース氏に報告して居る。或農家へ一匹の牧羊犬が迷ふて來たことがあつて、農夫は其の犬を留めて置いて、其の翌夜牧羊場の容子を觀察に遣はした。然るに其の犬は非常に狼狽して歸つて來たので、農夫は其の容子で何か異狀のあることを知つて、牧場へ行つて見た。ところが自分の牧場と隣りの牧場との間の垣根が破れて、兩方の羊が全く混合して居た。其れから農夫は其の犬の助力に依つて兩方の羊を分離し、垣根を假りに繕つて歸つた。

次の夜、農夫は同じ時刻に家畜を見廻りに出かけた。其の時犬は何處へ行つたか見えなかつたが、牧場へ行つて見たら、犬は既に先きに行つて居たので、大に驚いた。然かのみならず、犬は農夫の賞嘆に堪えざる働きをして居た。何かといふに、羊は又た垣根を破して混合しかけ居たのであるが、犬は其の垣根の破れた處へ坐つて之れを防いで居たのである。

牧羊犬の知力に就ては、之れに類する實例が澤山あるが、一々擧げなくとも、上述の一例に據つて其の一般が知れるだらうと思ふ。

二一一　犬の奸智

二一一　犬の奸智

犬には極めて奸智に長けて居て、實に狡猾なことをするものがある。ロード　ブローガムといふ人は其の著書のうちに、夜になると窃かに出かけて羊を苦しめに行く犬の話を載せて居る。其の犬は夕刻には從順に繋がれて居て、人が皆寢靜まると巧みに頸環を脱し、牧場へ行つて羊を苦しめて、夜の明けない内に歸り、嫌疑を避くる爲めに、再び元の如く頸環を箝めて寢て居るのである。其の奸智の長けて居ることに至つては驚かざるを得ない。此れは實に不思議なやうな話であるが、併し斯ういふ例は外にも實際あるので、ロマニース氏も之れを證する爲めに、下の如き事實を擧げて居る。

ロマニースの友人で、モルレーといふ人が一匹の犬を飼つて居て、夜になると何時も繋いで置いた。然るに其の近所の牧場へ毎夜羊を殺しに出かける犬があるので飼主は大に困り、其の犬は確かにモルレーの飼犬に相違ないといふことを發見して、其れを訴へて來た。そこでモルレー氏は、夜見張りをして居た所が、其の犬は人が

寢靜まると頸環を脱し、數時間何處かへ行つて、其れから歸つて來て、頭を頸環の中へ入れて元の通りに其れを箝めて寢ることを發見した。

又たロマニースは自分が獨逸に居るときに、葡萄の甚だ好きな犬があつて、夜になると此れと同一の方法で葡萄を盗みに行つたので、其の盗賊の犬たることは暫らく誰も氣附かなかつたと言つて居る。

二一二　媾和の爲めに物を贈る

犬は一たび喧嘩をした後、互に媾和するときには、其の一方が他の犬に物を與へる本能的觀念がある。此れは實に面白い習慣であるが隨分斯ういふことはあるので、其の實例に乏しくない。今その一二の例を擧ぐれば、バッドコックといふ人は下の如き事實を報告して居る。

バッドコック氏の友人の飼つて居た犬が、或時其の遊び友達たる他の犬と激しく

二一三　錢を啣へ行きて菓子を買ふ

喧嘩をして別れた。然るに其の翌日になつたら、一方の犬が媾和の爲めに、ビスケットを啣へて來て與へた。

スミートンといふ人も亦た之れと同一の事實をロマニースに報告して、氏の飼つて居る犬は、何か惡い事をして譴られた後、再び可愛がれるときには、色々の物を啣へて來て切りに機嫌を取ると言つて居る。

二一三　錢を啣へ行きて菓子を買ふ

犬が敎はつて錢を啣へて菓子などを買ひに行くことは、何人もよく知つて居ることである。然るに特に敎はらなくとも、錢を持つて物を買ひに行くやうな場合もあるので、ジャップといふ人は、自分の知つて居る犬で、錢の使用を敎はらないのに、何時も銅貨を持つて菓子を買ひに行くものがあると言つて居る。此れらは恐らく人間のするのを見て自然に學んだものであらうと思ふ。

犬の物を買ひに行くことに就て、グードヒールといふ人は、下の如き面白い實例を擧げて居る。一匹の小さい雜種犬があつて、其れに一ペンニーか或は半ペンニーの銅貨を見せると、直ぐ其れを啣へて菓子屋の店へ行く。其れから店の戸へ飛び上がつて呼鈴を鳴らし、人が出て來て錢と引換に菓子を與へるまで、其れを續けて居る。而して半ペンニー持つて行つたときには、ビスケットを少し與へると滿足して居るが、一ペンニーの時には、菓子パンを一つ與へなければ決して滿足しない。或時其の犬が屢々買ひに來て、菓子屋ではウルサクて困つたので、錢を取つて了つて菓子を與へなかつたところが其れから犬は買ひに行く毎に決して錢を人の手に渡さずに床の上に置いて、品物を與へらるゝまでは、其れを取らせなかつたのである。

二一四　犬と畫像

犬は己れのよく知つて居る人の、大きな寫眞或は畫像を見ると、忽ち之れを理解

するのである。併し之れを理解させるには、畫像を適當な位置に置かなければならない、若し高い所に掛けてゞもあると、其れを理解することが出來ないので、床の上に立てるか、或は椅子の上に載せて、自然に人の居る位置に置くが必要である。犬と畫像との關係に就ては、種々の事實が觀察されて居るが、茲には唯だ其の一例を擧ぐるに止めざるを得ない。

クレホールといふ人は雜誌『ネーチュア』に下の如き事實を報告して居る。犬を飼つて居た婦人が死んで、其の寫眞（大きな）を犬の遊んで居る部屋へ持つて來て、壁へ立てかけた。犬は小供らと遊んで居たが、偶然その寫眞が眼に附くや否や、平伏して頻りに身躰を顫はせた。而して寫眞の處まで這つて行つて、其の前に坐はり、大きな聲で吠へ始めた。其の容子は『ナゼ口をきかないか』と言つて居るやうな風であつた。其れから寫眞が他の方へ移された所が、又た其處へ行つて、其の前へ坐はり、頻りに吠えて居たといふことである。

此れは寫眞を見て、實物と同樣に思ふたものらしいが、犬は如何なる場合に於ても寫眞或は畫像を實物視するかといふに、必らずしもさうではないらしい。犬の心には實物の如くであるが併し實物とも違ふ變なものだといふ感想の起る場合があるやうに思はれる。

二一五　犬の推理作用

犬が餘程發達した推理作用を具へて居ることは種々の事實に徵して疑ひのない所である。而して此れに就ては、是れまで學者の觀察した事實が澤山あるが、複雜なるものを茲に擧ぐることは出來ない。だから成るべく簡單な實例を二つばかり述べて置くことにする。併し他の標題の下に擧げた事實のうちにも、推理作用の加はつて居るものは幾らもあるので、特に茲に擧ぐるものゝみが推理作用を示す實例とは限らない。殊に、次の節に述ぶる二つの事實の如きは、高等なる推理作用の實例と

二一五　犬の推理作用

見るべきものである。

リヴィングストンは下の如き事實を觀察して居る。主人の跡を追ひかけて行く一匹の犬があつて、道の三方に岐れて居る衢へ行つた。ところが其の犬は、二つの道を嗅いで見て、主人の通つた痕跡を見出さなかつたので、今度は嗅いで見ずに直ぐ第三の道へ駈けて行つた。此の動作には確かに推理作用がある。三條の道があつて、主人の通つた痕跡が甲にもなく乙にもないから、主人の行つたのは丙でなければならないといふ推理をしたのである。二つの道を嗅いで見たのみで、直ぐ第三の道を取つたので、其の推理作用のあることは知れる。

ウイリアム　ケアルンスといふ人は下の如き事實を觀察してロマニースに報告して居る。或時犬が小麥の積んである處に遊んで居たが丁度の犬の足許から不意に大きな鼠が一匹跳び出した。而して其の鼠は、其處から十二ヤードばかり離れた池の中へ跳び込んで、遁げんとした。犬は其れを追つかけて行つて、自分も跳び込んで

少しの間泳いだが、鼠の方が早いのでトテモ追つ附けなかつた。ところが犬は再び岸へ泳ぎ戻つて、池の縁を駈けて、向ふの岸へ先き廻はりをし鼠の到着するのを待つて居た。而して鼠が泳ぎ着くと同時に其れを捕へた。

ケアルンス氏は此の事實を述べ、而して『余は未だ曾て斯の如き著るしは例を見たことはない、若しそれが推理でなければ、余は推理と稱すべきものあるを知らず』と言つて居る。

二一六　單獨にて汽車旅行をなす

最も怜悧な犬のうちには、唯だ獨りで汽車に乘つて、一定の距離を旅行するものがある。斯る實例は決して稀なことではないが、其のうち二つばかり茲に述べよう。

ホルスフォールといふ人は雜誌『ネーチュア』に、犬の汽車旅行に就て下の如き事實を報告して居る。英國のランベドルといふ處の旅館に非常に怜悧な犬が飼つてあ

二一六　單獨にて汽車旅行をなす

つた。其の旅館の主人はランベドルから三マイル離れたハルレクといふ市街にも別の家を持つて居たので、此の犬は勝手に自分の好きな方へ行つて遊んで居た。而して其の間を往復するには、歩いて行くこともあつたが、大抵は汽車で往復して居たのである。ランベドルからハルレクの方へ行かんとするときに、ランベドルの停車場へ行つて獨りで、汽車へ乘つて、ハルレクへ着すると跳び出るのである。然るに或時跳び降ることが出來なくて、ハルレクの先きのサルセルノーといふ停車場まで持つて行かれたことがある。ところが其の犬は此處へ跳び降りて、ハルレクへ歸る次ぎの汽車の來るのを待つて居た。若し其の犬に抽象的推理力がなかつたならば、決して斯ることの出來る筈はない。

又た英國のダンダルクの鐵道技師であつたタウンセンドといふ人の飼つて居た獵犬に就て一層面白い話がある。此の犬はスコットランド產の極めて怜悧な犬であつて、何時もタウンセンドと共に汽車旅行をして居たのである。

或時ダンダルクの停車場で、タウンセンドが或婦人の爲めに切符を買ひに行つて居る間に、其の犬は獨りで汽車へ跳込んで、クローンスといふ處まで持つてかれて了つた。犬は跳び降りて見た所が、自分獨りであることを知つて、驛長室や、改札人の室へ行つて主人を探した。けれども居なかつたので、其から一マイルばかり離れて居るクローンスの市街へ行つた。而して技師の事務所へ行つて又た主人を尋ねたが、其處にも居なかつたから、其れから再び停車場へ歸つて來て、上り汽車のプラットオームへ行つた。間もなく上り汽車が着いたから、其れへ跳び込んだ所が、驛夫に追出されて了つた。

其の時丁度カランといふ所へ行く枝線が出來かけて居て、まだ全通はして居なかつたが犬は其の枝線の機關車へ跳込んで枝線の通じて居る限り行つて了つた。然るに其處からカランまでは猶ほ五マイルもあつたが、其の間駈けてトウ〳〵カランへ到着した。此處にはタウンセンドの妹が住んで居たので、犬は其の家を覺えて居て

二一六　單獨にて汽車旅行をなす

其處へ主人を探しに行つた。ところが矢張り主人は居なかつたから、直ぐ鐵道の通じて居る所まで駈け戻つて、クローンスへ歸る汽車へ跳び込んで再びクローンスの停車場へ歸つた。而して驛長から食物を與へられて其處に寢て居た。其れから翌朝の四時になつて貨物列車へ跳び込んでダンダルクへ歸り、其處で始めてタウンセンドを見出したのである。

此れは實に驚くべき事實であつて、犬に知力が進んで居なければ、到底斯る旅行は出來ない。此の一例に據つて考へても、斯る高等なる犬の知力が如何に發達して居るかといふことが分かる。

第十五編　猿の心理

第五十三章　其の總論

二一七　猿の種類

余は、最下等動物たるアミーバの心理的觀察から始めて、動物進化の順序に從ひ、段々と高等なるものゝ心理を説明し、今や、最高等動物たる猿類の心理を述べんとするに至つた。然るに猿類の心理を説くに先つて、一言述べて置かなければならないものがある。其れは何かといふに、猿の種類と其の心理的觀察の比較的不充分といふことである。

同じく猿類(Pitheci)と稱するものゝ中にも色々あるので、動物學の上では、之れを三亞目に分けて居る。其の一は鉤爪類(Arctopitheci)、此れは南米の產であつて、

キヌザル、シ、ザル等の類をいふのである。其の二は廣鼻類(Platyrrhini)、此れも亦た南米の特産であつて、ホヘザル、クモザル等を指すのである。其の三は狹鼻類(Catarrhini)、此れは最も高等なものであつて、三つの科に分れて居る。その一は類犬科(Cynocephalidae)、アフリカに産する狒々即ち英語でバブーンと稱するものは即ち此れである。その二は獼猿科(Cercopithecidae)、我が國に産する獼猿、ヲナガザル等之れに屬するのである。その三は類人科(Anthropomorphae)、此れは狹鼻類のうちでも最も高等なものを含むので、黑猩々、大猩々(英語のゴリラ)、猩々(英語のオーラング、ウータング)、猿猴(テナガザル)等の類である。

二一八　猿類に關する心理研究の比較的不充分

猿類、殊に類人科に屬する猿類に至つては、人間と實に接近して居るので、其の心理作用も大に發達して動物界の最高等に位し、人類の下等なるものゝ心理作用と殆ど擇ぶ所なきに相違ない。然るに不幸にして其の心理上の觀察に至つては、比較的に不充分である。決して犬などの如く精密に研究されて居ない。此れには種々の理由がある。

第一猿といふ奴は使用の目的に向つては、殆ど不必要である。假令之れを使用した所で、余り役に立たない。又た猿は極めて惡戯を好む動物であつて、人家に飼養して可愛がるものとしては適しない。其れから又た猿を飼養して置くには、甚だ面倒であつて、決して犬や猫を飼つて置くやうな譯には行かない。然かのみならず、猿は犬の如く人間に懷いて、其の天性の變ぜらるゝことを好まない。此れらの理由で、昔から人間が猿を飼養することは極めて少いのである。之れを飼養しなければ、細かに其の心作用を觀察する機會は得られない。だから猿類に關する所の心理的研究は、割合に進歩して居ないのである。

併し全く猿を飼養しないといふ譯ではないので、動物園などには種々の猿が居る。

又た一個人にして物ズキに之れを飼つて居るものもある。だから其れらの個々の猿に就いて、觀察された事實は幾分かないではない。又た獵夫の偶然の觀察から得た所の材料もある。假令比較的には不充分なりといへども、個々の觀察から得られた所の材料は幾らかある。今日の所では、猿の心作用に關しては、唯だ其れだけの材料に據つて、不完全なる判斷をなすより外に仕方はない。然るに唯だ其れだけの不充分なる材料に據つて考へても、猿の心作用が他の動物と比較して遙かに高等に位し、而して吾人の心作用に最も接近して居るといふことは知れる。是れから其の事實の重もなるものを擧げて、今日吾人の知り得るだけの猿の心理を述ぶる積りである。

第五十四章　猿類の感情

二一九　兒に對する愛情

猿類は愛情や同情の著るしく發達して居る動物である。先づ此れらの感情から述べて行く積りであるが、第一に兒に對する愛情から始めて行かう。

南米に產する廣鼻類の一種でケブス（Cebus）と稱する猿がある。レングルといふ人の觀察した事實としてダーウインが其著書中に擧げて居る所に據ると、此の猿は自分の兒に蠅が留つてウルサイときには、必らず注意して其れを追ひ拂つてやるのである。又たダーウインの書に據ると、ドヴンセルといふ人は猿猴（ヲナガザル）が小川に於て其の兒の顏を洗つて居るのを見たといふことである。此れらの猿が、其の兒に對する愛情の如何に強いかといふことは之れに據つても知れる。

又た雌猿は自分の兒を失ふと、非常に悲しむので、或種類の猿の如きは此の哀しみの爲めに死ぬことがある。此れは北アフリカに於てブレームといふ人の現に實驗した所である。

又た猿は啻に自分の兒を愛するのみならず、他の猿の兒でも大に之れを愛する。

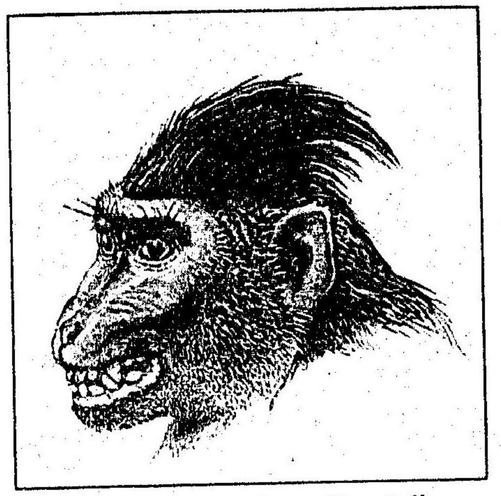
故に孤児は必らず他の猿が己れの兒として親切に養育する。而して此の愛情のあることは、雄も雌も變らないといふことである。

二二〇　同僚間の愛情

又た猿類は同僚間の愛情が非常に強い。ジョブソンといふ人は自から猩々狩りに行つて觀察した所によると、船から一匹の猩々を銃殺するときには、何時も必らず其の友が集つて來て、人間が岸に達しない前に、其の死躰を持ち去るさうてある。

又たゼームス　フォルブスといふ人は、猿の同僚に對する愛情に就いて、其の著書のうちに左の如き事實を擧げて居る。

獵夫の組の一人がバンヤン樹の下に於て、一匹の雌猿を殺して、自分のテントの中に持つて來た。ところが其の猿の同僚が四五十匹集まつて來て、其のテントを取卷き、頻りに聲を立て殺害者を侵擊せんとする勢てあつた。そこで獵夫は銃を示した所



猿の一種シノピテカスニゲル
の愛されて悅べる容顏

同上の滿足せる容顏

が、彼等は其の結果の恐るべきことを知つたと見えて、やうやく退いた。併し其の團躰の頭は猶ほ其處に滯まつて、激しく鳴いて居た。さすがの獵夫も其の有樣を見ては、其の友を殺したことに就て幾らか悔恨の情を催うし、其れに對して發砲し兼ねた。遂に其の猿はテントの入口まで來たが、併し如何に威迫しても到底益なきを知つて、悲哀に叫びつゝ極めて意味ありげな身振りをして、切りに其の死躰を乞ふものゝ如く見えた。獵夫は見かねて其の死躰を與へた所が、哀しさうに兩手で其れを抱へ、待つて居る同僚の處に持つて行つた。若し一たび此の愁嘆の有樣を見んか、何人といへども再び猿類に向て發砲するものは無からう。

併し上に述べた事實に據つて、凡ての猿類或は其の最多類が、斯の如く其の同僚の死躰に對して情が厚いものと想像してはならぬ。或學者の言つて居る所に據ると、猿猴の一種の如きは、傷づけられた同僚に對しては非常に同情が厚いが、併し死んだものに對しては少しも注意しないやうてある。だが兎に角同僚間の愛情の厚

いことに至つては何れの種類に於けるも一樣である。

二二一　猿の同情

ロマニースの友人で、ゼームス　マルコルムといふ人が、猿の同情に就いて自から目擊して其れをロマニースに語つてる實に感すべき話がある。其の人は精密なる觀察者として充分信據するに足る人だとロマニースは言つて居る。だから其の話を茲に擧ぐることにする。

嘗てマルコルム氏が航海をして居たときに、其の船に普通の印度猿が二匹飼つてあつた。親子ではなかつたが、其の一匹の方は大分年を取つて居て大きかつた。或日、小さい方の猿が船から海へ落ちた。ところが大きな方の猿は狂氣の如く騷いで、舷を駈け廻り、其れから外板（がいばん）へ下つて、一方の手を以て船へ摑まり、他の方の手を以て、自分の腰に卷き附けてある綱の一端を、其の溺れて居る友へ下げてやつた。甲板に居るものは、其の動作を見て一人として感激しないものはなかつた。だが不幸にして其の綱の端は、溺れて居る友の處まで達しなかつた。併し水夫が長い綱を下げてやつたら、猶ほ其れを握る感覺があつたので、其の猿は救ひあげられたといふことである。其の同僚に對する同情の厚いことは、此の一例に依つて知れやうと思ふ。

二二二　恨みの感情

傷づけられた猿の動作を見ると、彼等には恨みの感情とも稱すべきものがあるやうに思はれる。エッセ氏の擧げて居る事實を茲に其の一例として述べよう。或人が、一匹の雌猿の其の兒を抱いて、岩の上を駈けて居るを見附けて、直ぐ其れに發砲した。其の猿は忽ち倒れたから、行つて見た所が、一方の手で稚兒を堅く胸に抱き、他の手で其の傷を指示した。其れから又た指に血を滴して高く擧げ、「斯る傷を負は

せて我れを殺し、我が稚見を殺すものは汝である」といふ無限の恨みを述ぶる容子が見えた。

二二三　滑稽の感

猿には又た滑稽の感があるに相違ない。此れは屢〻猿の動作を觀察した人のよく知つて居る所であらうと思ふ。それに就てダーウインは自己の觀察を述べて左の如く言つて居る。

數年前のことであつたが、余（ダーウイン）は動物園に居る若い猩々を注意して觀察して居た。而して余は其の猩々が滑稽の感を現はすことを充分確かめた。一例を擧ぐれば、其の事は充分分かる。其の猿が食事をする錫の器は幾らか可笑な形であつたが、空になると、猿は其れを倒まにして冠ることがあつた。さうすると、其の食器は丁度滑稽な帽子に見え、其れと同時に猿は齒を露出して興を添へたので、何時も觀客を笑はせないことはなかた。斯ることをしたからつて、猿は自分の快樂になつて居ないことは明かである。

以上はダーウンの言つて居る所であるが、此の一例に據つても、猿に滑稽の感があつて其れが爲めに滑稽なことをするといふことは分かる。

二二四　遊戯の感

猿に遊戯を樂しむ性質のあることは、動物園へ行つて、一二時間も猿の前に立つて居れば、忽ち分かるに相違ない。だから茲に更めて實例を擧ぐる必要はなからうと思ふ。黑猩々（チンパンジー）は集つて、音のする木片を棒切で敲くことがあるが、サヴエージ氏の説に據ると、此れは單に遊戯の目的を以て集まるのだといふことである。

二二五　好奇心

二二五　好奇心

猿は他の動物よりも余ほど好奇心が強い。恐ろしく思ふものでも、好奇心の爲めに、見に行かずに居られないやうな場合が澤山ある。此れは下に述ぶるダーウンの實驗に據つてよく分かる。

嘗てダーウンは、猿の好奇心を實驗する爲めに、生きた蛇を紙袋に入れ、其の口を緩く閉ぢて置いて、動物園の猿の居る所へ入れてやつた。忽ち一匹の猿が近づいて、注意して其の袋の口を開き、中を覗いて見て、直ぐ其れを投げ捨てた。其れから一匹づゝ來て、頭を擧げて、上向いて居る袋の口をコワ〳〵覗き込んだ。恐ろしく感じて居ながら、其れを覗かずには居られなかつたのである。

第五十五章　猿の知力

チンパンジーの失望せる容顏

マンチエスター動物園のチンパンジー

二二六　猿と鏡

猿は高等なる知力の最も發達して居る動物であるが、其れに始めて鏡を與ふるときは如何なる考へを起すか。之れは甚だ面白い實驗である。クローラ　ロバートソン教授は嘗て自から實驗した所を述べて左の如く言つて居る。

余（ロバートソン）は多年以前に、ヨルヂンテス　ブランテスに於て、下に述ぶるやうな事を目擊した。其の時非常に感動したので、爾來幾回となく、繰反して其の話をして居る。一匹の大きな猿―余は其れを類人猿であつたと信じて居るが、併し何の種類であつたか確かに知らない――が多くの小さい猿と一所に大きな鐵の籠に入れられて、其の小猿等を制御して遊んで居た。見る人々は面白がつて、菓子などを澤山持つて來て、鐵竿の間へ投げてやると、其の猿は何時も手を伸ばして其れを取つた。

二二六　猿と鏡

そのうちに、誰れか小さい鏡を投げてやつたものがあつた。其の鏡は本の框へ箝めて丈夫に造つた、柄の着いて居るのであつた。猿は直ぐ其れを取つて槍の如く振り廻はし始めた。ところが突然彼れは其の鏡に自分の寫つたことを發見して、暫らく當惑して其れを眺めて居た。鏡の後には無論自分と同類の他の猿が居ると信じて居たのであるから、其れを見出す爲めに鏡の後に頭を向けた。然るに何も居なかつたので、大に驚いたが、自分の見樣が遲かつた爲めだと自から考へたらしい。

そこで彼れは大に注意して其の鏡を一層自分に近づけ、極めて迅速に其の後を眺めた。又た何もなかつたので、猶ほ一回之れを反復した。併し何も居る筈はないから、始めの驚きは變じて怒りとなり、其の鏡を非常な勢ひで床へ投げつけた。鏡は忽ち破れて、其の碎片は落ちて了つた。併し彼れは猶ほ其れを叩きつけて居たが、框に殘つて居る碎片に寫つた自分の影像かフト見えたので、モー一回試みようといふ決心をしたらしい。而して今度は一層綿密に一層迅速に眺めたが、併し其の結果は

前と變る筈はなかつたから、其の怒りは殆ど無限に達した。而して齒を以て鏡も框も共に嚙み割り、床の上に打ちつけて、碎片の外何も殘らない迄に破はして了つた。

二二七　猿の經驗

最も精密なる觀察者レンゲル氏は、猿が經驗に依つて知識を得ることに就て、甚だ面白い觀察をして居る。レンゲル氏は自分の飼つて居る猿に始めて雞卵を與へた。ところが猿は其れを打破はしたので、中の身を大抵コボして了つた。然るに一たび此の經驗をしてから、猿は雞卵を貰ふも必らず其の一端を何か堅い物に打ちつけ、而して指を以て其の碎片を取り去つた。

又た或時其の猿は鋭利な刃物で傷をしたことがあつた。然るに其れから後は、再び刃物には觸れなかつた。又た觸れるにしても非常に注意して其れを掴んだ。

又た其の猿に砂糖の塊を時々紙にクルンで與へることがあつたが、レンゲルは或

時生きた蜂を紙に包んで與へた。ところが猿は急いで其れを開いて刺された。然るに一たび此の事があつてからは、猿は何か紙にクルンだ物を貰ふと、先づ其れを耳の側へ持つていつて、中に運動があるか、何うかといふことを吟味した。

一つの場合にあつた事は、他の場合にもあるならんといふ考は、歸納的推理の萌芽であるが、吾人が通常經驗に依つて知識を得るといふのは、即ち此の種の推理作用なのである。以上の觀察に據ると、猿が此の種の歸納的推理に依つて知識を得ることは、極めて鋭敏なので、少しも人間と異なる所はない。却つて小兒や鈍い人間よりも一層速かなのである。猿の知力の一般に發達して居ることは此れに據つて知れる。

二二八　猿の機械學的知識

猿は自分の經驗から得た所の知識を總合して、或目的を達する爲めに、機械學的原理に適つた動作をする。此の事に就ては、色々學者の觀察したものがあるが、其の二三の例を擧げよう。有名なキユビエルの飼つて居た猩々は、自分の屆かない高い所のカキガネを外さんとするときには、何時も椅子を曳いて來て、其れを蹈台にしたといふことである。此れは犬及び其の他の怜悧なる動物の到底なし得ない工夫である。

又たレングル氏は、猿は自分の力で開くことの出來ない重い箱の蓋を開かんとするときには、棒切を持つて來て、其れを槓杆にして其の蓋を開くと言つて居る。槓杆を一つの機械として使用するものは、唯だ猿のみであつて、他の動物には決して之れを見ない。

又た本書の終にある「觀察日記」中にも述べてあるが、猿の機械學的知識として驚くべきものは、彼れらが螺旋（スクリユー）の原理を自から理解し得ることである。斯る理解力に至つては猿の外には之れを持つて居るものはない。

又た猿は石を搥として使用することを知つて居る。蛎牡の殻などを破はすのは、即ち此の方法なのである。此の事實はダムピール及びヴフエルの兩氏が始めて發見してから、多くの人の觀察して居る所である。

猿の知力に就ては、猶ほ述ぶべきものがあるけれども、其れらは次章の觀察日記に委しくあるから、茲には略して置く。

第五十六章　猿の觀察日記

ロマニース氏は、嘗て動物の心理に關する著述をなすに當つて、自から猿の精密なる觀察をして見たいといふことを思ひ立つたので、其の志望を動物園の監督者スクレーター氏に告げ、而して動物園から猿を一匹借り出すことを賴んだ。ところがスクレーターは其れを承諾したので、ロマニースは其の時動物園に集めてある猿類の中で、最も知力の進んで居るらしく見ゆるものを一匹撰んで借出した。

其れは廣鼻類の一種で、ブラジル產のケブス　フアチユエルス（Cebus fatuellus）と稱する猿であつた。

然るにロマニースは其れを自分の家へ置くのは不便であつたから、其の近所に住つて居る妹の家へ托し、而して其の猿を精密に觀察して心理上興味のある點を其のまゝ一々記錄することを妹に依賴した。其の婦人は斯る事に就ては精密なる觀察者として充分信據さるべき人であつて、ロマニース自身も妹の觀察は其の正確なことに於ては、自分が觀察したのと少しも違はないと言つて居る。

ロマニースが其の猿を妹に托したのは、千八百八十年の十二月十八日であつたが、妹は其の日から始めて翌年の二月二十八日までの間、毎日精密に之れを觀察し、而して其れを一々日記的に記錄したのである。下に擧ぐる所のものは、即ち其の日記の飜譯である。之れを一讀すれば、猿の心作用の如何に進歩して居るかといふことが畧ぼ知れやうと思ふ。

ケプス　フアチユエルスの觀察日記（一八八〇年）

十二月十八日　この日彼れ（猿のこと）は小さい箱に入れられて到達した。その小さい箱から大な箱に移されたが、其れが爲めに驚いた容子で、大に泣き叫んで居た。

十九日　彼れは箱から出されて、頸環に鎖を附けて終夜室内に置かれた。溫和で、從順であつて、余の着物の裾のうちに其の顏を匿して居た。

二十日　彼れは大に活潑になつて、幾らか敵對する氣味になつた。特に奉公人に對して其うであつた。彼れは余の母を好んだ。而して彼れは（母が其の鎖を持つて居て）母の寢床へ行つて、柔和に、懷かしさうに、母と共に遊び戯むれて居た。併し誰れか奉公人が寢床の近くに來ると、怒つて其れに跳び附いた。余は此の日彼れが胡桃を割るのを始めて見た。胡桃は餘り堅すぎて到底齒では割れない。そこで彼れは、飲料を入れて與へられて居た鉢の平たい底で敲きつけて胡桃を割つた。彼れは終日絶えず活潑であつた。而して夜になつたら、溫かな肩掛で巧みに身躰を包んで、翌朝の八時頃まで、充分熟睡して居た。

二十一日　余は彼れが惡戯を好む性質の甚だ強いことを知つた。此の日、彼れは酒盃と小さいコップとを貰つた。ところが、彼れは其の酒盃を力かぎり床に投げつけて破はして了つた。然るに、小さいコップは床の上に投げつけたのみでは、ナカ〳〵破れないことを知つたので、其れを打ちつける爲めに、何か堅い物を切りに尋ねて居た。ところが、其處に眞鍮の寢臺の柱があつて、其れが其のコップを打ちつけるに至極適して居るやうに見えたので、忽ち其のコップを振り上げて、數回その柱に激しく其れを打ちつけた。彼れは其れを悉く粉碎して、大に滿足の色を表はした。又た彼れは何か棒キレがあると、其れを折ることを好んだ。その方法は、先づ何か重い物躰を見附けて、其れと壁との間に棒の一端をハサみ、他の一端にブラ下がつて其れを折つたのである。又た彼れは着物のキレを破はしたことが屢々ある。其れを破はすには、齒を以て亂暴に引き裂く前に、先づ其の織物の絲を、注意して

抽き拔いて其れを破はしたのである。彼れに取られても少しも差支のない物であれば、彼れは直ぐ其れを捨てゝ了ふし、又た我々の氣遣つて居るやうな大切なものであれば、假令一片の紙片であつても、其れを持つて離さない。其の代りに何を與へても、決して其れを捨てることはない。食物は彼れを誘引するに力の强いものであるが、併し斯る場合には何んな食物といへども彼れの注意を轉ぜしむることは出來ない。又た如何ほど讃つても、其れは單に彼れを怒らしむるに過ぎない。而して彼れは其の品物を全く破はして了ふまでは、固く其れを持つて居て離すことはない。今日余は彼れに、胡桃を破はす爲めに槌を與へたが、彼れは其の目的の爲めに適當に使用して居る。

二十二日　本日知らない人（仕立屋）が、彼れの繫がれてある部屋へ這入つて來た。そこで余は、其の人に彼れの胡桃を割るのを見せる爲めに、彼れに一個の胡桃を與へた。ところが其の胡桃は良くなかつたので、彼れは失望の色を表はした。其の仕立屋は彼れの失望の顏を見て笑つた。ところが、彼れは大に怒つて、何でも手當り次第に周圍の物を取つて仕立屋に投げつけた。先づ其の胡桃を投げつけ、次に槌を投げつけ、次に格子の外から珈琲壺を取つて其れを投げつけ、それから終に自分の肩掛を投げつけた。而して其の物を投げる容子を見るに、兩手を以つて其の投げんとする物を持ち、眞直に立ち、腕を頭上に伸ばし、狙ひを定めて、非常な力で其れを投げたのである。

二十三日　彼れとシャープと稱する一匹の獵犬との間に絕えず喧嘩が起るやうになつた。併し彼等は互に幾らか遠慮して居るやうに見える。犬は胡桃を奪つて彼れの鎖の屆かない處まで、其れを持つて逃げて行くやうな事をする。そこで彼れは犬を捕へる。併し犬を捕へて苦めたり、傷けたりする事は、恐れてしないやうに見える。だが彼れは胡桃や、胡蘿蔔の片（きれ）を犬に投げつけ、又た犬に向つて頻りにシャベる。然るに又た時によると親しむやうな容子をして、手を伸ばして犬の方に近づくこと

もある。だが犬は疑つて居て、決して彼れに近づきはしない。奉公人（殊に其の一人）に對する彼れの敵意は、益々加はつて來た。而して其の奉公人が胡桃を持つて來ると、其れを取るときには、必ず其の手を亂暴に掴んだ。又た屢々其の奉公人に物を投げつけるやうな事もあつた。然るに彼れは、全く之れと違つて、余の母ならば何んな事をしても少しも搆はない。

二十四日　彼れは朝の運動を終つたから、余は彼れを母の寢床から取去らんとしたが、其のとき彼れは數個處余に嚙み附いた。余は格別其れを心に留めて居なかつたが、彼れは後に至つて自から羞かしく感じたやうに見えた。而して自分の腕で顏を匿して、暫らくの間靜かに坐つて居た。彼れは元來惡戲がしたい性質なのだから、何でも物を轉倒することは甚だ好きである。だが物を轉倒するに當つて、其れが自分の上に倒れて來ないやうに大に注意をして居た。例へば、彼れは椅子を倒さんとする場合に、椅子が殆ど釣合を失つて將に倒れんとするまで其れを自分の方に引つ

ばる。其れから椅子の上の方を見詰めて居て、若し椅子が自分の上に倒れて來ることを知れば、忽ち其れを避け、而して非常の樂しみを以て其の轉倒を見て居る。モット重い物を倒す場合も亦た之れと同樣である。例へば、重い大理石で上の方の出來て居る手洗臺がある。彼れは屢々其れを倒すがいつも充分注意して、其れが爲めに傷を受くるやうな事は一回もない。

二十五日　余は本日斯ういふことを觀察した。胡桃か何か彼が欲しいと思ふ物があつて、其れに自分の鎖の屆かない時には、彼れは忽ち棒キレを差出して、其れを自分の方へ引き寄せる。又た其れで成効しないときには、彼れは直立して、肩掛を頭に被り、其の兩隅を持つて之れを背負ひ、其の一端が胡桃の處に達するまで、力かぎりに其れを前へ投げ出すのである。さうすると、肩掛の一端は胡桃の上に被さるから、其れを引き寄すれば胡桃も共に自分の近くに來ることになる。斯の如くして鎖の屆かない遠方にある物を巧みに引き寄せるのである。又た其の鎖が、遊戲の

爲めに備へ附けられて居る棒に卷き附いて短かくなることがある。斯る場合には、彼れは精密に其れを見詰め、又た指を以てアチラやコチラに其れを引いて見て、何んな工合に卷き附いて居るか其れが分かると、よく考へて其の棒の周圍を回はり、悉く其れを解くのである。又た彼れは鎖が歩く妨げになると、尾に其れをひつ掛け、後の方に高く上げて、足にからまらないやうにする事がある。余は毎朝彼れを母の寢床に伴れて行く爲めに、其の鎖を弛めるが、其の時には彼れは何時も喜び立つて、跳ね廻つたり、鎖を引つ張つたりして居る。だが時としては、鎖が卷き附いて、余が其れを解くに長くかゝる時には、余の傍に靜かに坐つて、恰かも余の鎖を解くのを手傳ふが如くに、其の指を以つて鎖を摘み始めることがある。

二十六日　彼れは何ものでも、獨樂の如くに廻はすことを極めて好むやうに見える。若し林檎か密柑をマルゴト貰ふときには、彼れは其れを食ひ始める前に、必ず坐つて其れを廻はすのである。彼れが密柑を食ふには、先づ其の外皮の一小部分を

噛み破り、其處から彼れの長い細い指を突つ込む。それから其の傍にある針金の網の下に其の密柑を置き、自分の口を前に開けた孔の處に當て、而して其の果物の汁の口に流れ込むやうに、其の針金の網で密柑を壓するのである。又た汁が澤山流れ出すときには、密柑を頭の上に保ち、而して其の汁を口へ流れ込ませる。斯ういふ風にして、巧みに密柑を食ふのである。

二十七日　此の日、彼れは大切な書類を手に持つた。而して例の如く、余は何ものを與へても、彼れをして其れを捨てしむることは出來なかつた。色々食物を與へて見たが、如何なる食物にも彼れは注意を向けることはなく、余が彼れを誘はんとすれば、彼れは唯だシャベルのみであつた。終に余は杖を以つて彼れを脅嚇して見たが唯だ彼れを怒らしむるに過ぎなかつた。彼れはシャベつて余に跳び附いた。その時母が來て、彼れの傍に坐つた。ところが、彼れは忽ち母の着物の裾に跳び附き、而して母が其の紙を彼れの手から取つても、少しも怒らず靜かにして居た。然る

に母が其の紙を余の手に渡し、其れから余が母の巧みに取り得たことに就いて笑つたが、其れを見て、彼れは忽ち歯を露出し、大に怒つて、余を嘲り叫んだ。笑ふことは、常に彼れを怒らせるやうである。例へば、或時彼れは寢床で甚だ機嫌よく母と共に遊んで居た。而して余が寢床の上に靜かに坐つて居る間は何事もなかつたが、彼れの愛らしい眼ツキを見て余が笑つたら、彼れは余を去らしめんとして忽ち余に跳び附いた。其れから復た懐かしげに母の處に歸り、頭を振つたり、轉がつたり、大に滑稽な容子をして歯を露出したり、微笑の如き聲を發したりして、甚だ樂しさうに遊んで居た。

二十八日　壁に密接して手洗臺を置き、其の大理石板に彼れの鎖を結び附けて置いた。手洗臺は余程重いから、到底其れを引いて行くことは出來ない。若し強いて其れを引つぱれば、倒れて彼れは傷を負はざるを得ない。そこで、若し彼れは自分の手の屆かない處で、何か惡戯をせんと欲するときには、充分注意して大理石の處

に行き、其の直立部と壁との間に己れの腕を推し込み、其れに依つて大理石板を少しづつ壁面から遠ざけ、終に壁と大理石板との間に自分の身躰の這込り得るやうにする。其れから背中を壁に附け、四肢を大理石板の直立にあて、而して彼れの長い脊の伸び得る限り、力を入れて其の大理石板を推するのである。斯の如くして、彼れは其の惡戯をなさんと欲する場所の方へ手洗臺を近づける。然るに、彼れが斯ういふ工夫をするのは、唯だ惡戯をせんと欲する時のみである。鎖の屆かない處にある食物を得る爲めには、彼れは斯る骨折をすることはない。今日も彼れは、其の近くに置いてある革箱の蓋を取らんとしたから、余は其の革箱を遠ざけた。ところが、彼れは其れが鎖の屆かない處へ遣られたことを知つて、忽ち驅けて行つて、上に述べたやうな方法で、その大理石を革箱の方へ推し動かした。其れから彼れは鎖が充分革箱へ屆くことを知るや否や、革箱の傍へ驅けて行つて、大急ぎで、其れを破はし始めた。

二十九日　余は面白いことを發見した。其れは、彼れの繋がれて居る鎖を持つて居る人であれば、如何なることをしても、彼は決して怒らないといふことである、例へば、何か彼れの持つて居る物を奪ふときには、彼れは大に怒るが、若し其の鎖を引つぱつて、他の方へ引き去られても、其れが爲めには少しも怒らない。彼れが何人かに嚙み附かんとするときに、他の人が其の後から彼れの鎖を引いて、之れを妨げるやうな事をしても、彼れは決して振り反つて鎖を持つて居る人に嚙み附くことはしないのみならず、其の引かるゝまゝに溫なしく從つて居る。若し犬に斯ういふことを行へば、直ぐ振り反つて嚙み附くのであるが、此の點は犬と大に違つて居る。要するに、彼れは己れが幽閉されて居ること、鎖で縛ばられて其の支配を受けて居ることを認め、其れを以て必然のことゝなし、其れに抵抗するのは全く無益のことゝ考へて居るらしい。然るに彼れは又た他の方に於ては、其の鎖が結び附けられて居る場所をよく知り、又た己れが其れを解くだけ怜悧であつたならば、自由を得ることが出來やうといふことを知つて居るらしい。我々は、彼れが上に述べたやうな方法で手洗臺を動かすことを發見してから床に環を打ち込んで、其れに彼れの鎖を結で附けることにした。然るに鎖が環に結び附けらるゝと同時に、彼れは其の連絡の工合を穿鑿し始め、其れから數時間同樣のことをやつて居た。併し彼れは色々試みても、其の鎖の到底解けないことを知つて、其れから槌を以つて力限りに、其の鎖と環とを打ち始めた。而して其の後毎日之れを續けて居た。

三十日　此の日も亦た彼れは、鎖の環に附着して居る部分を頻りに槌で打つて居た。彼れは指を以て、幾回となく鎖をアチラやコチラへ潛らせたが終に鎖は環へヒッ掛つて短かくなつて了つたので、余は其れを解くに十五分間ほどかゝつた。然るに其れを解くのは彼れには甚だ面白かつたのである。彼れは余の傍に靜かに坐つて、余の指の動くのを注意して見詰めて居た。細かに其れを見る爲めに、余の指をソット一方へ引つ張つたり、或は恰かも余の爲した所を問ふが如くに、怜悧な眼ツキを

して余の顔を眺めたりした。余が其の鎖の引っ掛つたのを解いて、長くしてやつた後彼れは亦た前の通りの事を猶ほ數時間續けて居た。併し再び鎖の環に卷き附かないやうに、大に注意をして居た。

三十一日　此の日彼れは衣紋架の蝶鉸に足の趾を狹まれて傷を得た。此れは隨分痛かつたに相違ないが、併し彼れは少しも騷がなかつた。又た敢て其の趾を引き出さうとも試みなかつた。強いて趾を取らんとしても、何の効もないのみならず、其れは却つて痛みを強くするに過ぎないといふことを彼れは知つたからである。唯だ彼れは余が其れを見出すまで、靜かに坐つて、少しく嘆息の聲を發して居たのみである。余は彼れの狹まれた趾を取るに當つて、隨分痛くしたのであるが、併し彼れは毫も動かずに、唯だ有難さうに余を眺めて居たのみである。

一月一日（一八八一年の）　彼れは最早自から鎖を解かんとする事は全く企てなくなつた。是れまでに色々試みたけれども、凡て失敗に歸したから、其れに就いては

確かに絶望したのである。而して彼れは縛られて居ることを憤ほるのみであつた。余が彼れを解いてやるときには、彼れは大に悦び、又た余が彼れを縛るときには、縛られることの確かに分かるまで彼れは待つて居る。而して縛られることが知れると、彼れは跳び擧つて余に咬み附くのである。

十日　彼れは何時も同一の場所に繫がれて居たから、今は既に彼れの知力を示すべき新らしい機會はなくなつた。余の母に對する彼れの愛情は日增に加はつて來た。母が外へ出るときには、彼れは如何なる遊びも、惡戯も忽ち捨てゝ、頻りに其の周圍を騷ぎ廻はり、一種愛嬌のある呼び聲を發する。斯る聲は母の室内に居るときには、決して聞かない所である。母が他へ行つて居ない間は、彼れは少しも休むこともなく、又た遊び樂しむこともなく、又た滅多に怒ることもない。然るに歸るや否や、彼れは全く前の通りの有樣になり、而して他の人に對する亂暴は、以前よりも一層甚だしくなるのである。

母は屢々彼れが持つて居る物を奪ふことがあるが、併し彼れは他の人に怒る如くに、決して怒ることはない。然るに、母が何か彼れの持つて居たいと思ふて居る物を奪ふときには、母に對して怒らないで、大抵他の人に對して怒るのである。そこで余は始め、彼れは全く誤解して居るのだと考へた。彼れは己れの大切な物を奪はれても、其れは自分の親しい友達（余の母）がしたのではなく、他の人がしたのに相違ないと確信して居るのだと考へた。ところが、上に言ふやうな場合が屢々あつて其れて余は、彼れは誰れが其の物を奪つたか實際知らない譯でないといふことを發見した。彼れは無論余の母が其れを奪つたことを知り、又た其の結果として腹を立てるのである。併し彼れは自分の平素懷かしく思ふて居る人に對しては怒らず、寧ろ其の怒りを、己れの常に喧嘩して居る人に對して漏らすのを得策と考へて居るらしく見ゆる。又た彼れは何時も余の母が彼れから何ものか奪ひ取つて、後其れを余に與ふるときには、母が自から其れを持つて居る場合よりも一層甚だしく怒るのである。此れは余が彼れの欲しいと思ふ物を得たのは、即ち余に取つて勝利であると彼れは思ふからである。又た余の母は思ふまゝに笑つても、少しも彼れは怒るやうなことはないが、併し余が少しでも笑ふと、彼れは必らず何かを余に投げつける。又た下婢が居ないときに、母が其れを喚ぶと、彼れは恰かも其の不在を咎むるが如く、下婢に對して大に怒り、而して其れに何か投げつける。或時、母が試みに下婢を謎つて、其れを打つ風をした。ところが彼れは全力を奮つて母に加勢をした。然るに余が下婢を謎るか或は打つても、彼れは左ほど其れに心を留めない。余の母が外出して居て歸つて來ても、彼れは非常に悅ぶことはない。母の聲が近く聞えて來るときには、彼れは樂しげに叫ぶが、併し母が室内に這入れば左程騷がない。母が外出して居ない間は、余は彼れと共に居て、何でも思ふことが出來る。思ふに、母が居なくなると、彼れは氣が沈んで、怒りを感ずることがなくなるのか、或は極懷かしい友達が居ない爲めに、可憐になるやうに注意するのかも知れない。然るに母

が歸つて來ると、彼れが他人に對する平素の惡い性質は、一時に悉く回復する。而して在らん限りの玩具を持つて再び遊び始めるのである。

十一日　彼れは人に物を投つける時には、先づ驅けて行つて、衣紋架の棒の上に登る。何故斯ることをするかといふに、人は足許へ物を投げられても餘り注意しないといふことを、彼れは知つたからであらうと思はれる。それで彼れは人の頭の上へ物を投げつけんとするのであるが、槌のやうな重い物を人の頭の上へ投げつけるだけの力は彼れにない。そこで彼れは其の敵の頭と水平の高さにまで登り、而して下に居るよりは一層高い處、又は遠い處まで、物を投げつけることを成効せんとするのである。

十四日　今日彼れは一個の竈掃木を得た。其の掃木には柄が附いて居て。其れは螺旋止めにしてあつた。彼れは忽ち其の螺旋を廻はして柄を外す方法を發見した。又た彼れは柄を外してから、再び其れを箝める方法を發見せんとして其れを試み始

めた。而して彼れは終に其れを成就した。始め彼れは柄の反對の端を穴へ差し込んで頻りに廻はして居た。併し其の廻し方は本統であつたのだ。幾ら廻はしても柄の箝まらないことを知つたので、彼れは柄を轉倒して、他の方の端を注意して穴へ當て箝め、其れから以前の通りに再び其れを廻はし始めた。此れを甘く箝め込むのは、彼れに取つては餘ほど困難な仕事であつた。先づ兩方の手で柄を適當の位地に保つて居ながら、其れを廻はさなければならぬ。此れは甚だ面倒なことである上に、掃木の長い刺毛は其れを適當の位に保つことを妨げるのである。ところが彼れは、先づ後肢を以つて掃木を保ち、其れから非常な耐忍をしてやう〳〵柄を穴へ箝め込み、而して螺旋が固くしまるまで、迅速に其れを廻はして、終に此の困難な仕事を全く成効した。此れに就いて最も注意すべきは、彼れが螺旋の廻はし方を誤らなかつたことである。彼れは始めに於いては屢々間違つたやうであつたけれども、一たび正しい廻し方を發見してからは、何時も右から左へ廻はすことを誤らなかつた。彼

母は屢々彼れが持つて居る物を奪ふことがあるが、併し彼れは他の人に怒る如くに、決して怒ることはない。然るに、母が何か彼れの持つて居たいと思ふて居る物を奪ふときには、母に對して怒らないで、大抵他の人に對して怒るのてある。そこて余は始め、彼れは全く誤解して居るのだと考へた。彼れは己れの大切な物を奪はれても、其れは自分の親しい友達（余の母）がしたのではなく、他の人がしたのに相違ないと確信して居るのだと考へた。ところが、上に言ふやうな場合が屢々あつて其れて余は、彼れは誰れが其の物を奪つたか實際知らない譯てないといふことを發見した。彼れは無論余の母が其れを奪つたことを知り、又た其の結果として腹を立てるのてある。併し彼れは自分の平素懐かしく思ふて居る人に對しては怒らず、寧ろ其の怒りを、己れの常に喧嘩して居る人に對して漏らすのを得策と考へて居るらしく見ゆる。又た彼れは何時も余の母が彼れから何ものか奪ひ取つて、後其れを余に與ふるときには、母が自から其れを持つて居る場合よりも一層甚だしく怒るのてある。此れは余が彼れの欲しいと思ふ物を得たのは、即ち余に取つて勝利てあると彼れは思ふからてある。又た余の母は思ふまゝに笑つても、少しも彼れは怒るやうなことはないが、併し余が少しても笑ふと、彼れは必らず何かを余に投げつける。又た下婢が居ないときに、母が其れを喚ぶと、彼れは恰かも其の不在を咎むるが如く、下婢に對して大に怒り、而して其れに何か投げつける。或時、母が試みに下婢を譴つて、其れを打つ風をした。ところが彼れは全力を奮つて母に加勢をした。然るに余が下婢を譴るか或は打つても、彼れは左ほど其れに心を留めない。余の母が外出して居て歸つて來ても、彼れは非常に悦ぶことはない。母の聲が近く聞えて來るときには、彼れは樂しげに叫ぶが、併し母が室内に這入れば左程騒がない。母が外出して居ない間は、余は彼れと共に居て、何ても思ふことが出來る。思ふに、母が居なくなると、彼れは氣が沈んて、怒りを感ずることがなくなるのか、或は極懐かしい友達が居ない爲めに、可憐になるやうに注意するのかも知れない。然るに母

が歸つて來ると、彼れが他人に對する平素の惡い性質は、一時に悉く回復する。而して在らん限りの玩具を持つて再び遊び始めるのである。

十一日　彼れは人に物を投つける時には、先づ驅けて行つて、衣紋架の棒の上に登る。何故斯ることをするかといふに、人は足許へ物を投げられても餘り注意しないといふことを、彼れは知つたからであらうと思はれる。それで彼れは人の頭の上へ物を投げつけんとするのであるが、槌のやうな重い物を人の頭の上へ投げつけるだけの力は彼れにない。そこで彼れは其の敵の頭と水平の高さにまで登り、而して下に居るよりは一層高い處、又は遠い處まで、物を投げつけることを成効せんとするのである。

十四日　今日彼れは一個の竈掃木を得た。其の掃木には柄が附いて居て。其れは螺旋止めにしてあつた。彼れは忽ち其の螺旋を廻はして柄を外す方法を發見した。又た彼れは柄を外してから、再び其れを箝める方法を發見せんとして其れを試み始

めた。而して彼れは終に其れを成就した。始め彼れは柄の反對の端を穴へ差し込んで頻りに廻はして居た。併し其の廻し方は本統であつたのだ。幾ら廻はしても柄の箝まらないことを知つたので、彼れは柄を轉倒して、他の方の端を注意して穴へ當て箝め、其れから以前の通りに再び其れを廻はし始めた。此れを甘く箝め込むのは、彼れに取つては餘ほど困難な仕事であつた。先づ兩方の手で柄を適當の位地に保つて居ながら、其れを廻はさなければならぬ。此れは甚だ面倒なことである上に、掃木の長い刺毛は其れを適當の置に保つことを妨げるのである。ところが彼れは、先づ後肢を以つて掃木を保ち、其れから非常な耐忍をしてやう〳〵柄を穴へ箝め込み、而して螺旋が固くしまるまで、迅速に其れを廻はして、終に此の困難な仕事を全く成効した。此れに就いて最も注意すべきは、彼れが螺旋の廻はし方を誤らなかつたことである。彼れは始めに於いては屢々間違つたやうであつたけれども、一たび正しい廻し方を發見してからは、何時も右から左へ廻はすことを誤らなかつた。彼

れは一たび其の願望を達するや否や、又た其の柄を外して、再び其れを箝めた。而して此の時は前回よりも餘ほど容易であつた。其れから彼れは幾回となく之れを反復して居た。然るに彼れは段々熟練して、螺旋を完全に使用するやうになつたら、其れを捨てゝ了つて、他の遊戯に轉じた。一つの注意すべき點は、彼れが自分の爲めに實際利益のないことに、斯の如く大に苦心するといふことである。思ふに、何にしろ己れの擇んだ仕事を成就したいといふ念は、彼れをして如何なる困難をも忍ばしむる充分の動機となるやうに見える。此れは實に人間と同樣の感情であるらしい。斯る感情は此の種類の猿にあるのみで、他の動物には現はれて居ない。彼れは人が見て居るか居ないかといふことには毫も注意しないのであるから、其れが賞讃の欲望に基いて居るのでないといふことは明かである。要するに、唯だ其の目的の成就といふことを目的として斯ることを仕遂げるのである。だから其れが成就せらるまでは、決し休むこともなければ、又た注意を他に轉ずることもないのである。

十六日　彼は怒つて居て、其れと同時に己れが持つて居たいと思ふ物を何か手に持つて居るときには、彼れは人に向つて頻りに其の物を投げつける眞似をする。併し固く其れを握つて居て、決して實際に投げることはしない。若し彼れが長い間何か一つの玩具を持つて居て、其れに飽きて了ふときは、少しも躊躇せずに、其れを人に投げつける。然るに若し新らしい玩具で、自分が價値のあると思ふものであれば、唯だ投げるやうな振りをするのみで、決して其れを放すことはない。彼れは自分の持つて居る杖で人を打つことがある。杖が人に屆かないときには、力限り地面を打ち而して屆きさへすれば此の通りに打つてやるのだといふことを示す。彼れは烈しく怒ると、高い處から巧みに人を打つ爲めに、長い不格好な杖を携へて、屏風の上に馳け登ることがあるが、之れを見るほど滑稽なことはない。彼れが手に棒キレを持つて居るのは、寧ろ愛嬌があるが、犬は其れを見ると大に怖はがる。彼れが余の母と共に、時々腰かける安樂椅子の上に、犬が來て臥ることがある。さうする

と、彼れは大に犬を妬み、棒で其れを衝いて逐つ拂つて了ふ。

十八日　今日一人の下婢が彼れの居る場所を掃除して居たが、彼れは大に怒つて下婢が掃かんとする毎に、其掃木を捕へた。そこで余の母が其の掃木を取つたが、彼れは忽ち溫和になつたのみならず、手を以つて部屋の隅に塵芥を集め、其れを掃木の觸はる處へ持つて行つたりなどして、大に母の掃除を手傳つた。

二十日　今日彼れは其の鎖を破はして、亂暴に一人の下婢に跳びついた。然るに母の姿を見たら、忽ち溫和になつて、其の裾に縋つた。別の鎖が用意さるゝ間、彼れは胡桃の入れてある革櫃の上に登つて居た。彼れは此の革櫃を特に自分の所有と思ふて居るのである。此の革櫃のうちには、胡桃の外に猶ほ他の品物も這入つて居る。だから人が時々此の革櫃へ何か出しに行くことがあるが、さうすると彼れは烈しく怒かる。誰れか行つて此の革櫃を開けるほど彼れを怒らせることはない。此れは彼れが胡桃を欲しいからではない。彼れは何時も自分の傍に食べ殘すだけ澤山の

胡桃を持つて居るので、假令その上貰つても大抵拒絶して居る。革櫃を開けると怒るのは、唯だ其れを特に自分の所有と思ふて居る爲めである。今日彼れは鎖が切れた爲めに革櫃の處へ行くことが出來るや否や、忽ち指を以つて其の錠を弄り始めた、そこで余は彼れに鑰を與へたが、彼れは全く二時間絶えずその鑰をて革櫃の錠を開かんと試みて居た。然るに此の錠は少し損じて居たので、其れを開くには余ほど困難であつた。だから余は彼れには到底其れが開けないと信じて居た。ところが彼れは終に其れを開く方法を發見し、巧みに鑰を差し込み、其れを前後に廻はした。而して彼れは一回試むる毎に、錠が開いたか何うか見る爲めに蓋を引き上げた。此れは彼れが人のするのを見て居て學んだ結果である。

二十一日　此の日余は蓋の釘附けにしてある木の箱と鐵の匙とを彼れに與へた。余は彼れが其の匙を挺として、其れで箱の蓋を開き得るか何うかを試みんとしたのである、然るに母が其の箱と蓋との間の割目に匙の柄を容れて、其れを開ける方法

を示したから、此の實驗は幾らか妨げられて居る。だから余は彼れが獨りて此の事に心づくか何うか其れを斷定することは出來ない。併し彼れは一たび匙の柄を其の割目に入れてから、其れを挺として巧みに用ひ、一方の端を力限りに押へ、釘を拔き取り、而して其の蓋を開けた。

二十二日　彼れは余の母の膝に坐はり、母は小さい海綿を以つて彼れの手を洗つて居た。手を洗はれるのは、彼れの大に好む所であつた。次に母は彼れの顏を洗はんとしたが、此れは彼れの甚だ厭がることであつた。母が洗ひ始める毎に、彼れは甚だ怒つた顏色を表はした。而して遂に母の膝から跳び下り、彼れが常々愛して居る一人の下婢に激しき打擊を與へた。此の下婢は彼れを怒らすやうなことは毫もしたのではない。然るに彼れが此の下婢に對して大に怒つたのは、即ち前にも記した通り、余の母には其の怒りを漏さず、之れを他の人に向つて發する所以である。彼れは怒つて居る時や、又た怒りの發した後には、何時も必ず大に食するのである。

又た怒りの長く續いた後は、彼れは何時も死んだ如くになつて横つて居る。是れ恐らく疲勞の結果であらうと思はれる。

三十日　彼れは握手の意味を全く理解した。而して誰れかに親しまんと欲するときは、何時も自分の手を差出して握手せんとする。親しい人が部屋に出入りをするとき抔は、特にさうである。彼れは今日長い間自分の弄具を持つて餘念なく遊び、何人にも心を留めずに居た。然るに余の母が、本日は余の誕生日であることを突然想ひ出した。ところが彼れは其れを祝する爲めに余の手を握つた。彼れが余の家へ來てから、余と握手したのは、此れが始めであつた。併し彼れは忽ち余に對して甚だしく怒つて、大に嘲けり、且つ物を投げつけた。此れは母が余に注意を向けた爲めに、其れを妬んだのである。

二月一日　彼れは食室に移され、而して火爐と窓との間に鎖で繫がれた。此處へ移されて母に屢〻會ふことが出來なくなつた爲めに、彼れは場所の變つたのを大に

不幸に思ふて居るらしい。

四日　彼れは引續いて沈欝であつて、其れが彼れを病氣に陷らした。彼れは決して遊戯することはなく、唯だ部屋の片隅に欝々として慄へて居るのみである。今日余は彼れが大に冷えて、不愉快らしいことを發見し、其手を溫めてやつた。彼れは實に柔和で、靜かになつた。而して余を好むやうになつたらしく見える。

八日　彼れは余と戯れるやうになつてから其の元氣は全く回復した。彼れは、今は、前に余の母を好んで居たと同樣に、余を好むに至つた。余は彼れを養つたり、彼れの居る處を歩いたり、又た彼れの持つて居る物を取つたりしても、決して怒ることはない。併し余の母が彼れを見に來ると、彼れは余に心を留めなくなる。だが以前の如く余に對して敵意を示すことはない。けれども奉公人に對しては余の母を見れば、矢張以前の通りに敵意を表はして居る。

十日　今朝我れらは彼れに一束の棒キレを與へた。彼れ其れを火に入れたり、又た

其れを引き出して其の煙つて居る端を嗅いだりして、終日樂しく遊んで居た。又た彼れは爐の中から燃片を引き出して、其れを頭や胸のあたりへ持つて、其の溫かみを悦んで居た。併し燒傷をすることは決してなかつた。彼れは熱い灰を頭にかけた。余は彼れに紙を與へたが、彼れの鎖の長さでは、充分火の處まで達することが出來ないから、彼れは其の紙を棒のやうな形に卷き、其の先端を火に入れ、其れに火が燃えつくや否や、其れを引き出して、暖爐の前の鐵格子へ載せて、非常に面白さうに其の火焔を眺めて居た。又た余は彼れに一枚の新聞紙を與へた。ところが彼れは其れを片々に裂いて、其の各片を上に述べた通り火に達する長さにまで棒の如く卷き、其れを一つ宛燃して遊んで居た。その間に彼れは一回も指に燒傷することはなかつた。

十三日　彼れは窓の摺戸を容易に開閉することが出來、又た暖爐に喰つ附いて居る螺旋は凡て之れを廻はし取ることが出來る。斯ることをするのは、彼れには余ほど樂しみの如く見えた。

十五日　彼れは此の頃余に甚だ親しむやうになつた。余の彼れと食を共にせんことを期望して、何か食べるときには、必ず其れを割いて余に與へる。斯く親切にされるので、時として大に困ることがある。今日も余の知らずに居る間に、彼れは汁に浸したパンの一片と牛乳とを自分の皿から取つて余の手に推しつけた。斯の如く余に食物を分け與へるのは、實に親切なことだと自から考へて居るのに相違ない。

十七日　彼れは自分の食つて居る燒パンの一片を犬に與へた。而して犬は其れを食つた、だが此れは犬に對する親切心から出たのではなく、其れを餌として犬を捕へんとする狡猾なる企圖から出たのである。併し其の時彼れは犬を捕へなかつた。此れは恐らく其の時余が見て居たのと、又た彼れは犬を余の友達と考へて居たのとに因るのであらうと思ふ。彼れは余が犬に食物を與へて居ると、實に意地の惡い眼ツキをする。

十九日　余は今日ブラッシュを以て彼れを擦つて居たら、彼れは其のブラッシュ

を取つて了つた。此の頃彼れは何か持つと、忽ち其れで窓を破はすから、弄具を持つことは禁じられて居た。其れが爲めに、此の頃は弄具は彼れには特に貴重であつたのだ。余はブラッシュを彼れに持たせて置くのは心配だと思ふたが、併し彼れは到底其れを放しさうもないことを知つた。そこで余は別の物を彼れの手の屆く處へ投げてやつた。ところが彼れは其れを拾ひに行く間、ブラッシュを後肢で握つて居て、決して放さなかつた。終に余は坐つて、靜かに彼れを呼んだ。ところが彼れは柔和く余の膝に登り、余の兩手に其のブラッシュを置いた。此れは、彼れが唯一人の親しい友達と不和になるのは好まないと自から考へたからに相違ない。

二十二日　彼れが其の時の氣分を示す有樣は、丁度反對の法則に適つて居るのであつて、實に面白い。例へば、怒つた時には、彼れは尾を直立せしめ、毛を逆立て四肢を以つて前方へ馳け出す。だから其の形は餘ほど大きく見える。之れに反して、愛情の起つた時には、彼れは顏を引つ込め、頭を地につけ、身躰を輪の如くし、徐

々と彼方へ退く。その歩くには三肢を以てし、前の一肢は身躰の退く爲めに後へ殘される。彼れは人に親しく其の手を取られんことを期望する。だから斯の如く自然の態度を取るのである。斯ういふ風をして後方へ歩いて居るときには、其の口は胸の方に向つて居るので、彼れが咬みつくことの出來ないのは明かである。だから此れは彼れが毫も敵意を持つて居ないといふことを示す至適の態度なのである。

一千八百八十一年二月二十八日

動物の心

終

動物の心
正價六十錢

明治三十七年二月二日印刷
明治三十七年二月五日發行

著作者　竹内楠三
發行者　岩崎鐵次郎　東京市神田區鍋町二十一番地
印刷者　森潤二　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍第一工場　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

著作權所有

發兌　東京神田鍋町廿一番地（電話本局三〇六七番）　大學館

前成田中學校々長竹内楠三先生著
催眠術施術圖寫眞五種入

學理應用 催眠術自在

（紙數三百頁）

價卅五錢 十九版
稅郵四錢

時事新報評、譯者が心理學上より常に催眠術を研究し居れる結果世人に催眠術の如何なるものなるやを知らしめんとして出したるものなり全篇を催眠術の歴史、催眠術概說、生理的徵候、治療法としての催眠術の六篇に分ち更に之を四十餘章に小分す論述詳密にして愈々讀んで奇術の愈々奇なるに驚かしむるものあり此書出でて俗間催眠術試驗の流行を見るに至る近時好評の一書なり

萬朝報評、近頃催眠術に關して公にされたる著書二三あり、就中竹内氏纂譯の本書は說述丁寧にして最も信憑すべきものとす、其の內容綱目の如きに頗る充實せるを以て今一々紹介し難きも、(一)催眠術の歴史(二)催眠術概說(三)催眠術狀態の徵候(上)(四)(下)(五)治療法として催眠術(上)(六)法律と催眠術の六篇に分ち、各篇又章を分ち遺憾なく說き盡したり、而して本書著述の目的及び其材料の出所に就て著者の自序中左の如き文言あり「余は催眠術の專門家でないが、心理上から常に之を研究して居るものであるから一般の人に催眠術の何たるを知らせたいといふ自的で本書を書いた次第である」「本書の材料は近年歐米に於て出版された催眠術に關する種々の本から出て居るのであるが、其の中で余が重もに據つたのは、獨逸の催眠術專門家アルベルト、モールといふ人の昨年出來た催眠術書である」

目次大要

各國催眠術○耶蘇奇跡と催眠術○動物磁氣發見○グリムスの電氣生物學狀態○催眠術實例及方法○自己催眠○凝視催眠○催眠鏡○音響催眠○魔術太鼓○觸感催眠○メスメル派催眠術ビトル催眠帶○筋肉運動催眠○壓醒法○催眠と想像○外感刺戟○一言にて覺醒及治病○僧號覺醒○三日間不醒○昏睡狀態○催眠されたき人○身體と催眠○年齡と催眠○男女と催眠○不承諾者催眠○催眠必要精神條件○偶然催眠○催眠狀態の階級と徵候○感應性昂進○筋肉影響作用○讀心術の心理的說明○人に知さず物を取る○確信と身體變化○被術者自由にさる○捕心術○全身不隨及其原因○强直狀態全身棒の如し○有を無と確信○眞暗中步行○壁を通し物を識別○思想傳達○天眼通○感覺移轉○感覺過敏○食慾缺乏○醫治○十四日斷食して滿腹飢餓を醫す○色情發生○疼痛減少○針を刺し疼痛不感○色情變性○不隨意影響腸の運動○八分間呼吸停止○發汗○精液淚液發射、乳液尿水分泌○脈搏、身體組織、日經變化○皮膚火傷○出血○記憶と催眠○二重意識○催眠中の心と覺後の心○療法としての催眠術○暗示療法原因催眠術三則○催眠術の治療を得る疾病○神經衰弱催眠治療○ヒステリー精神病○解剖的疾病○犯罪せしむ○カステラン催眠姦淫○催眠財產橫領○催眠術と犯罪自由○祕密を語しむ○其他奇現象數百項

前成田中學校々長竹内楠三先生著　讀心術實驗圖入

心理應用 讀心術自在

正價卅五錢　郵稅四錢　三版

東京朝日新聞評 本書は心理學上より讀心術の基礎を解き其原理を明にし應川の方法を述べたるものなり「讀心術と稱するものがある是は文字の示す通りに他人の心を讀む術である」と世人は決して有意的に表示しない心の狀態を知ることが出來るのである自ら苦痛に出ずず行につて此術に依ると他人が決して有意的に表示しない心の狀態を知ることが出來るのである自ら苦痛に出ずず行にも現さず深く心のうちに隱蔽して居る秘密を看破することが出來るのである「心理學上より知識の應川にて人の心が讀めるといふ不思議の秘傳なり。

日本新聞評 (上略)此書は實に此術に就き發四の頭腦が今日迄に研究したる所を平易に解述したるものし。讀心術の原理及方法に就て詳述せり(下略)

萬朝報評 讀心術とは讀んで字の如く人心看破術なり心理學上より其の原理を明かにし應川の方法を述べたるものにて心と筋肉との關係讀心術の基礎たる諸事實例へば(泣くとか笑ふとか顏を赤くするとかいふが如き事實)讀心術の原理及方法に就て詳述せり(下略)

二六新報評 讀心術とは讀んで字の如く人心看破術なり心理學上より其の原理を明かにし應川の方法を述べし所以か「心と筋肉との關係」「讀心術の基礎たる諸事項」「讀心術の原理及び方法」等に分ちて多く發四諸家の所論究よりして引いて催眠術とは相近き讀心術に得る所少からず依つて即ち此等あり を論したる物此種の事實に行はれたらんには一般に補益する處少からざる可し。

東京日々新聞評 新書は心理學上より讀心學の基礎を示し其原理を明かにし其應川の方法を述べたるものにして心と筋肉との關係讀心術の基礎たる諸事原理及方法の三大區別をなし心の所在より既き起し心の狀態、表出實驗應川等を細論し人の心は看破し得らるべき所以を述べたり殊に近來の著述中にては最も明瞭にして趣味あるの其得たらん。

前成田中學校長竹内楠三先生著

實用催眠學

價卅五錢　郵稅四錢　八版　(三百十頁)

目次大要＝催眠術は個人にても行ひ得○催眠術發達の期○覺術時期○メスメルズムスの時期○ブラーチズムの時期○シャーコー派の時期○學術的時期○ブレードの催眠術と現今の催眠術との相違○催眠學の原理○催眠術研究の近況○ブレードの催眠術始めて佛蘭西に入る○外科手術に於ける催眠術の應川○暗示説の發見者リーボール○シャーコーの發見○催眠狀態に關するシャーコーの説○ブライエルの研究○催眠術の科學的基礎○英國に於ける催眠術研究の近況○催眠術の治効ある疾病の種類○米國に於ける催眠術研究の近況○最近獨逸の學界に於ける新催眠術の研究○神經及び精神病學上の著述と催眠術○實驗心理學上に於ける催眠術の應川○神學者と催眠術○催眠術の學派○催眠狀態の眠術○萬國催眠術學會○大學に於ける催眠學の講義○近世の有名なる文學者と催眠術○社會的生活と催性質○研究方法○催眠狀態の特徴○日常經驗せる類似の催眠狀態○催眠狀態と普通の睡眠○催眠狀態に於ける淺深の別○意志と睡眠の類似○催眠狀態と自然の睡眠との相違點○淺い催眠狀態と睡眠との比較○治理の有無に由つて催眠狀態と睡眠とを比較す○運動の制止○自覺の存在○催眠狀態の幻覺と睡眠中の夢との比較○夢の覺醒後に及ぼす影響は殘留暗示の結果に相す○動の有無に就いて催眠狀態と睡眠とを比較す○睡眠中の隣語○夢の覺醒後に及ぼす影響は殘留暗示の結果に相す○睡眠と催眠狀態との生理的徴候の相違○催眠狀態を生ずる方法と睡眠を生ずる方法との比較○精神錯亂と催眠狀態との比較○敬斯的里と催眠狀態との比較○麻痺及び之に類する諸病態と催眠狀態との比較○覺醒狀態と催眠狀態との比較○催眠狀態の有無を決する方法○動物に於ける催眠的現象○犬猫猿等の催眠術○暗示に依つて家畜を御する方法○ロンドンの醫師ヴイルソン氏猿馬等に催眠術を施す○催眠術に依つて野獸を馴らす方法○鳥の蛇に魅惑される話○印度の僧侶の數個月に亘れる睡眠○催眠的無意識不動狀態○催眠術の學理○催眠現象の説明とは如何なる事ないふか○人は他人の觀念に依つて影響さるゝ傾向を有す○豫期作用○有意運動に關する暗示の現象○感覺の如感○消極的幻覺の説明○記憶に關する現象の説明○殘缺暗示の説明○生理學的説明の必要模擬作用と大腦皮質の活動○催眠狀態と大腦中樞○腦の血液と催眠狀態との關係○施術に關する注意○施術者に對する被術者の確信○催眠術に對する被術者の感想○外境に關する注意○施術の方法○暗示を與ふる順序○施術に必要なる知識

前成田中學校々長心理學催眠學大家

竹内楠三先生主筆

催眠術

第一號

目次大要

催眠術の危險と施術の方法○眠らせる方法の適否○施術者の不注意に由て心動及び呼吸の止りたる失策の實例○治療の爲めに催眠術を施すときの注意○施術の結果として不快感の殘れる場合○物を見て俄然病の情を陷る危險○催眠術にかけられ易くなる弊害及其豫防法○胃腸の神經作用が胃の働を支配する事實○加答兒に忠者、妄想ハ加はれる實例○教育家に催眠術研究の必要○慢性胃加答兒の矯正○催眠術は暗示の目的に應用する可否に就て○心理學大家ヴントの殷○道德的不具の催眠術の原理○催眠術の無痛分娩の實蹟○印度の僧侶ヨーギン○解脫法と催眠術○ヨーギン派の修行法○病氣を癒す方法○自から呼吸を止めて死し自から蘇る奇術○催眠術に依つて一婦人を三日間驚す○催眠術の學的說明○催眠術を應用したる犯罪の實例○催眠術と犯罪○ラトーンの精神療法○ラトーンが門弟に教へたる治療法○動物の催眠狀態と心動及び呼吸作用○ラトーンの關係○催眠術に依つて馬其他の動物を馴らす方法○催眠術に依つて治療されたる病氣の種類○歐米諸大家の實驗報告○諸大家の施術統計○鶏に催眠を施す實驗○鳴、鷺、七面鳥、金鵄雀其他の鳥類の催眠○海豚の催眠○鰐、蛙、等の催眠○催眠術に依つて治療されたる病氣の種類○歐米諸大家の實驗報告○諸大家の施術統計○治療矯癖の實例○神經痛の治療○腟瘻の治療○ヒステリーの治療○眼催術に依つて乳の出たる實例○病的色情の矯正○小兒の夜泣き、手淫、喫煙等の矯正○催眠術の應用心理學講話—第一回—身心の關係、

催眠術ハガキ集 何人も投書する得 讀者は催眠術一切の質疑を爲すことを得 數十件

實用催眠術問答 毎月一回發行 一冊 十三錢 郵稅一錢 合計十四錢

催眠術注意 『催眠術』六冊 七十五錢 郵稅六錢 合計八十一錢 十二冊一四四十四錢 郵稅十二錢 合計一四五十六錢 郵券代用一割增

前成田中學校々長竹内楠三先生著

近世天眼通實驗研究

（不思議實驗圖入）（三百十頁）

價四五錢 郵稅錢

近世科學界の一大問題たる第二人格說の解說を始めとして輓近の實例中最も不思議なる異聞を蒐め總てこれを哲理心理の原則に照して論證す其目次の一二●三百哩以外の火事を知る●睡遊中の天眼通●ハウフエの天眼通に關する證明●山中にて突然幻覺を見る●幻覺に依て友人の死を知る●體內の銅片發見●厚き目蔽ひして文字を讀む●夢の天眼通●熱睡中の卓說●睡遊中の怪力●器物書籍にメスメル術を施す●外感を經ず心を他人に通ず●二個の自我を有する婦人●全く別人となる法●覺術機械●人格變化の原因●二個人格性質相違●第二人格第一人格へ文通す●天眼通自動機械プランセット●人の秘密を書き表す●プランセットの不思議の働●手の自動に依て遠方の事情を知る●潛伏人格の奇妙の作用●熱火自刄疾痛不感●幽靈の實驗●以心傳心●感覺共通等材料豐富

田中仙樵君著

人心觀破 骨相術自在

（說明圖數十個入）

價三十五錢 郵稅四錢

骨相學の定義利益沿革○腦と精神の關係○骨相と腦髓の關係○神經質○多血質○粘液質○胆汁質○心性質○強筋質○活動作と骨相○才能と性質と音聲行相○愛生智測量法○觀相法○動物通靈○殺戮○秘密○蓄財○食慾○友情○愛郷○繼續○牽關○名譽○謹慎○慈悲○尊敬○剛直○公明○希望○驚愕○想像○滑稽○摸擬○心理生理病理考古經濟教育法律社會人類美術動物諸學科の關係と應用

西洋手相判斷

（手相圖五十個入）

價廿五錢 郵稅四錢

萬朝報記者松居松葉君譯

手相學とは何ぞ○手相學の根源○手相學は事實より成る○頼死の手相○手の筋○手の圖○手掌—指—指先○關節—爪○拇指と其秘密○普通の手—女の手—殺人者の手○手の山○火星の筋—手首—心の筋○頭の筋○月取を綾る法○山の上の形—山の上の頂なる筋○命の筋○運の筋—肝臟の筋—乳の道○日の筋—直覺の筋○四角の塊—三角の塊—機會の筋—五本の指と筋の形○實用手相學○少壯時代の生活、身體一般の事、不時の災難、最後(一)病魔(二)愛及離婚(三)眞身及離婚(四)獨身及離婚(五)運命(六)特別なる職業に就ての成功不成功(七)金持として成功不成功

前成田中學校々長心理學催眠學大家

竹内楠三先生主筆

催眠術

第一號 目次大要

○催眠術の危險に就て○催眠術の危險と施術の方法○眠らせる方法の適否○施術者の不注意に由て心動及び呼吸の止りたる失策の實例○治療の爲めに催眠術を施すときの注意○施術の結果として不快感の殘れる場合○物を見て偶然催眠する習慣に陥る危險○催眠術にかけられ易くなる弊害及其豫防法○胃腸病の精神療法○精神作用が胃の働を支配する事實○慢性胃加答兒に患者、妄想ハ加はれる實例○教育家に催眠術研究の必要○道徳的不具の矯正○催眠術な教育の目的に應用する可否に就て○心理學大家ヴントの説○催眠術の原理は暗示○催眠術應用無痛分娩の實蹟○印度の僧侶ヨーギンの解脫法と催眠術○ヨーギン派の修行法○病氣を癒す方法○自から呼吸を止めて死し自から蘇生する奇術○催眠學的説明○催眠術を應用したる犯罪の實例○催眠術と犯罪の關係○催眠術に依つて一婦人を三日間睡す○催眠狀態の心動及び呼吸作用○プラトーンの精神療法○プラトーンが門弟に教へたる治療法○動物の催眠○鶏に催眠を催す實驗○鴨、鷺、七面鳥、金絲雀其他の鳥類の催眠○海豚、蛇、鰐、蛙等の催眠○催眠術に依つて馬其他の動物を馴らす方法○催眠術に依て治療されたる病氣の種類○歐米諸大家の實驗報告○諸大家の施術統計○治療矯正の實例○神經痛の治療○膣痙攣の治療○ヒステリーの治療○催眠術に依つて乳の出たる實例○病的色情の矯正○小兒の夜泣き、手婬、喫烟等の矯正○催眠術應用心理學講話―第一回―身心の關係、

實用催眠術問答 數十件

催眠術ハガキ集 何人も投書するを得

注意『催眠術』讀者は催眠術一切の質疑を爲すことを得

毎月一日發行 一冊 十三錢 郵税一錢 合計十四錢

六冊 七十五錢 郵税六錢 合計八十一錢

十二冊一圓四十四錢 郵税十二錢 合計一圓五十六錢

郵券代用一割増

前成田中學校々長竹内楠三先生著

近世 天眼通實驗研究

（不思議實驗圖入）（三百十頁）

價五十錢 郵税四錢

近世科學界の一大問題たる第二人格説の解釋を始めとし晩近の實例中最も不思議なる異聞を蒐め總てこれを哲理心理の原則に照して論斷す其目次の一二●五官以外の火事を知る●睡遊中の天眼通●ハツフェの天眼通に關する證明●山中にて突然幻覺を見る●幻覺に依て友人の死を知る●體内の鋼片發見●厚き目蔽ひして文字を讀む●夢の天眼通●熟睡中の卓説●睡遊中の怪力●器物書籍にメスメル術を施す●外感を經ず心を他人に通ず●二個の自我を有する婦人●全く別人となる法●覺術機械●人格變化の原因●二個人格性質相違●第二人格第一人格へ文通す●天眼通自動機械プランセット●人の秘密を發す●プランセットの不思議の働●手の自動に依て遠方の事情を知る●潜伏人格の奇妙の作用●熱火白刄疾痛不感●幽靈の實驗●以心傳心●感覺共通等材料豐富

田中仙樵君著

人心觀破 骨相術自在

（説明圖數十個入）

價三十五錢 郵税四錢

骨相學の定義利益沿革○腦と精神の關係○骨相と腦髓の關係○神經質○多血質○粘液質○膽液質○快活質○心性質○强筋質○均分質○動作と骨相○性質と音聲○行相○才智測量法○觀相法○動物通有的才能○戀慕○愛兒○相愛生○友情○愛郷○繼續○爭闘○殺戮○秘密○蓄財○食慾自尊○名譽○謹愼○慈悲○尊敬○剛直○公明○希望○驚愕○想像○滑稽○摸擬○心的生理病理考古經濟教育法律社會人類美術動物諸學科の關係と應用

萬朝報記者松居松葉君譯

西洋手相判斷

（手相圖五十個入）

價廿五錢 郵税四錢

手相學とは何ぞ○手相學の根源○手相學は事實より成る○頓死の手相○手の筋○手の圖○手掌―指―指先○關節―爪○拇指と其秘密○普通の手―女の手―殺人者の手○日取手の山―山の上の形―山の上の重なる筋○命の筋―な綫る法○火星の筋―手首―心の筋○頭の筋○運の筋―肝臟の筋―乳の道○日の筋―戀の筋―直覺の筋○四角の場―三角の場―機會の筋―五本の指と筋の形（一）實用手相學○少壯時代の生活、身體一般の事、不時の災難（二）最後（三）病氣（三）愛及戀（四）獨身及離婚（五）運命（六）特別なる職業に就ての成功不成功（七）金持として成功不成功

同鹿市
隠著

動物界奇談

寫眞版挿入
價廿五錢
郵税四錢

目次大要古　人能く鳥獸の語を解す○象の作戰計略○象と犀の戰爭○象の捕獲○象の馴養象に鑿を仕込む法○亞非利加產と亞西細產○世界第一の大象○象牙の話○獅子と虎○獅子の飼養法○熊の性質○熊兒の襲○亞非利加の駄獸○班驢の捕獲○鮫○水雞とバイク○背美鯨○鯡○眞甲鯨○鯨油○鯨の交尾○座頭鯨○長須鯨○槌鯨○赤坊鯨○ごと鯨○捕鯨の沿革○海豹○毛波海豹と毛海豹○海獅○海象○海象の交尾○海象狩○石決明○眞珠○海綿と珊瑚○麝香と麝猫○狐○赤狐○十字狐○白狐○青狐○銀狐○狐の魔力○馬屁○海鯉○夜の動物○鷺鳥○梟○大蝙蝠○蝙蝠○蟻虱○角鴟○牡壯雌雄○一身兩性共有○蚯蚓水蛙の毒○魚類の交尾○鳥類の交尾○蛇と蛙○こしきのとぐろ○蟻○蟻の强能○雄虫雅虫戰虫○蟻の產卵○白蟻○猩々○猩々の住地○墨猩々○金鵄の風菜○金鵄の視力○鷹○鷹の馴養法○海鷲○動物の價格○豹○河馬○牛○角馬○馴鹿○鹿○袋鼠○豺○モンキースコ豚○白狐○海象○ハマドリアス○ボンネット○駝鳥○ユミュー○鴉○鶴○海鴎○白鵠○コンドル○鯉○龜總て二十四章に分ち更に數十節に細別し動物界の奇談を網羅せり

45
291

45
291

057609-000-5

45-291

動物の心

竹内　楠三／著

M37
CAR-0200